

はじめに

「道教とは？」 修験道とは？」

道教は中国で発生した三つの大きな宗教の一つで、儒教・仏教と合わせて数えられます。

びっくりするほど多くの神々を内包した多神教で、伝説によれば黄帝が開祖であり老子がその教義をまとめ、後漢の張陵が教祖となつて教団を創設したとされるのが一般的です。

不老長寿を追求める「神仙思想」や御札を用いる呪術である「符籙」、亡くなった人物の魂を救い災いを追ひ払うための「齋醮」、「陰陽五行」、未来を占つて予言をおこなう「讖緯説」、黄帝・老子を神仙として崇拜して信仰する「黄老思想」、金属の精錬技法や医学技術とも関わりが深い宗教です。

皇帝から農民にいたるまで、社会のさまざまな階級に浸透していました。中国と親交を深めていく中で日本にもたらされ、修験道をはじめとして陰陽道、密教にも多大な影響を与えました。

一方、日本の修験道ですが、7世紀頃の伝説的な人物である役優婆塞が起源とされています。

「神道」「仏教」「密教」そして山を神霊や祖霊、精霊の住まう神聖な場所とする「山岳信仰」、民間信仰、巫女や市子などといった巫覡に関わる「シャーマニズム」を含み、複雑に、そして高度に結びついた宗教が「修験道」です。厳しい修行として断食や瞑想、滝行などをおこない、禁欲的な生活を送り、肉体を痛めつけることで霊的な力の取得を目指します。

険しい山々を踏破する修験者は、山の霊気を自分に取り込み、山と一体化することで修験者自身が「仏」となるのです。

「道教」の道士・仙人を、そして「修験道」ではその開祖と言われる役優婆塞を中心にすえて紹介していきます。

橘伊津姫

もくじ

修験道・道教

久米仙人	4
一角仙人	10
神々と結ぶ絆・籙	18
役優婆塞（役小角）	20
呪いを誦持して鬼神を従える	22
前鬼と後鬼	28
玉藻前	30
阿蘇に伝わる修験者伝説	46
長善坊	46
木連坊	48
百鬼夜行に遭う	52
修験者のうっかりミス「釘を打て」	58
道教の影響が色濃く残る『牛郎織女』	64
修験者の装束	74
カラス文字で描かれた護符・熊野牛王宝印	80
歩く屍体・キョンシー	82
不老不死の妙薬	84

■久米仙人

大和国吉野郡（現在の奈良県吉野郡）に「龍門寺」という寺がありました。

この寺に二人の男がこもって、仙人になるための厳しい修行に励んでいました。

一人の名前は「あずみ」、もう一人を「久米」と言いました。

先に修行を終わらせて仙人となり、空に飛び去っていったのはあずみの方でした。

置いていかれてなるものと、続いて久米も修行を終わらせて昇仙することができました。

仙人となった久米が空を飛んでいる時に、吉野川の川岸で若い女性が洗濯をしているのを見つけました。

衣類を洗うために着物をたくし上げ、足を出して洗濯をしている女性の姿に、久米仙人の目は釘付けになってしまいます。

せっかく修行を積んで昇仙した久米仙人でしたが、女性の生足に心を動かされた途端、空を飛ぶ力を失って、川岸の女性の目の前に墜落してしまいました。

神通力を失った久米仙人はただの「人」になってしまい、その女性と結婚して夫婦になるといっしょに暮らしはじめました。

久米仙人が妻と暮らしていると、時の帝が高市郡（現在の奈良県橿原市周辺）に都をつくる命令を出し、



そのために国中から多くの人夫が集められました。

久米仙人も人夫として、その現場で働くことになりました。

現場で働く人夫の多くが、久米仙人のことを「仙人」と呼んで親しく接していました。

そのことを不思議に思った行事官（朝廷の役人）が、近くにいた者に問いかけました。

「どうしてあの男のことを『仙人』と呼ぶのだ？」

すると人夫たちは真面目な顔をして答えました。

「あの久米は、以前龍門寺にこもって仙人になるための修行を完了させ、空を飛ぶほどの神通力を得ることができました。ところがその時、吉野川で生足をさらして洗濯をしている女性を見つけ、その足の白さに目がくらんで、空から落ちてしまったのです。そのために久米はただ人となって、今ではその女性を妻に迎えて暮らしています。それで自分たちは彼を仙人と呼んでいるのです」

「では久米は、尊い身分の、やんごとなき人物ではないか。修行を経て昇仙し、一度は仙人になった方だろう。たとえそのようなことがあったとしても、会得したすべての徳を失ったわけではないであろう。ここにある材木だって自分で持ち歩くのではなく、神通力で飛ばせばいいのではないか」

行事官たちがそのように冗談を交わしているのを聞いて、久米仙人は彼らにこう言いました。

「わたしは仙人の術を忘れて随分時間がたちました。今はそこら辺にいる、ただの人と何も変わりありません。期待に応えるのは難しいでしょう」

しかし、心の中ではこう思っていました。

『わたしは厳しい修行によって神通力を会得したが、ただ人のように女人の姿に心を奪われてしまい、仙人であり続けることができなかった。だけど、あれだけ長い間修行した仙術だ。仙人修行のための仏菩薩が助けてくれるかもしれない』

そして行事官たちに言いました。

「ですが、やってみましょう。どれだけのことができるかわかりませんが」

「それは素晴らしい。ぜひともお願いします」

行事官はそう言って久米仙人に頭を下げましたが、内心では「こいつはなんて馬鹿なことを言うヤツなんだ」と嘲笑っていました。

久米仙人は静かな道場にこもって心身を清潔に保ち、断食をおこなって七日七晩途絶えることなく神仏に祈りを捧げました。

七日目には行事官たちは久米仙人が現場にいないことを知って、「どうせ何もできやしない」と笑う者、「仕事を放り出しやがって」と怒り出す者、「いったい道場で何をしているんだ？」と不思議がる者ときまぐれまでした。

八日目の朝になって、それまで晴れていた空がにわかにはじめ、まるで月のない夜のように暗くなってきました。